

婦人科

1. 婦人科の平成27年活動概要と特徴等

全国的な産婦人科医不足のもと、平成18年1月より婦人科医一人体制による診療活動を行っている。一人体制での診療を余儀なくされているが、悪条件下で診療活動ができるだけ維持されるように努力した。また、引き続き院内外科系各科（救急、外科）との連携を行った。

2. スタッフ

部長 神田 裕樹（日本産科婦人科学会専門医、母体保護法指定医）

3. 平成27年診療実績及びその評価

A 手術に関して

平成27年1月から12月までの総手術例数は79例（平成26年：81例）であった。このうち悪性腫瘍および上皮内腫瘍に関する手術例数は24例（平成26年：21例）であり、全手術症例の30%（平成26年：26%）であった。内訳は子宮頸癌または上皮内腫瘍18例（平成26年：12例）、子宮体癌3例（平成26年：3例）、卵巣癌（低悪性度腫瘍を含む）2例（平成26年：5例）であった。子宮頸部上皮内病変に対する観血的治療（円錐切除術、LEEP、焼灼術）は16例（平成26年：12例）で、全手術症例の20%（平成26年：15%）であった。なお、死亡例、術後後遺症例などの重大な有害事象は発生しなかった。

また、良性疾患に関する開腹手術数は19例（平成26年：18例）であり、子宮または筋腫摘出術は14例（平成26年：16例）、卵巣または嚢腫摘出術は11例（平成26年：9例）（子宮の手術との重複有り）であった。なお、死亡例、術後後遺症例などの重大な有害事象は発生しなかった。

腹腔鏡による手術例数は7例（平成26年：8例）であり、全婦人科手術症例の9%（平成26年：10%）であった。対象疾患は良性卵巣腫瘍4例、子宮内膜症3例であった。手術内容は付属器摘出術6例、卵巣嚢腫摘出術1例であった。なお、死亡例、術後後遺症例などの重大な有害事象は発生せず、開腹移行症例は0例であった。

子宮鏡による手術例数は9例（平成26年：19例）であり、全婦人科手術症例の11%（平成26年：23%）であった。対象疾患はポリープ病変4例、子宮筋腫3例、その他2例であった。手術内容はポリープ切除術4例、筋腫切除術1例、子宮内膜焼灼術3例、その他2例（重複有り）であった。なお、死亡例、術後後遺症例などの重大な有害事象は発生せず、開腹移行症例は0例であった。

当院が力を入れている救急症例に関して、中場外科主任部長兼救急センター一長の協力の下に、平成27年は2例（平成26年は2例）（卵管卵巣腫瘍1例、卵巣腫瘍茎捻転1例）の緊急手術を行った。

B 婦人科検診および婦人科精密検査に関して

平成27年1月から12月までにスクリーニング目的で施行した子宮頸部細胞診の例数は1018例（平成26年：902例）であった。このうち総合検診のオプション検査での例数は631例（平成26年：505例）、国家公務員共済組合連合会関連の委託検査での例数は274例（平成26年：274例）、他施設からの委託例数は113例（平成26年は123例）であった。

平成27年1月から12月までに施行した子宮頸部細胞診の異常に基づく精密検査（コルポスコピーおよび狙い組織診）の例

数は169例（平成26年：126例）であった。対象疾患は子宮頸部軽度異型上皮97例、中等度異型上皮43例、高度異型上皮19例、上皮内癌1例、子宮頸癌3例、その他の病変7例であった。

4. 各診療科・センターの特筆すべき事項

現在のところ常勤医師一人体制で診療のため、悪性腫瘍の治療や腹腔鏡手術は医療安全管理の観点から症例を十分に検討した上で、安全性の上から可能と判断した症例にのみ施行している。良性疾患に対する開腹手術、子宮鏡手術、円錐切除術などは一人体制でも十分に対応できている。

5. 平成27年の目標達成度

A 紹介患者数の対前年維持

平成26年の紹介患者例数は257例であるため、平成27年の目標紹介患者例数は257例であるのに対し、平成27年の実績は合計295例であり、その達成度は115%であった。

B 手術例数の対前年維持

平成26年の手術例数は81例であるため、平成27年の目標手術数は81例であるのに対し、平成27年の実績は合計79例であり、その達成度は98%であった。

6. その他

平成27年は大阪医専において、疾病治療学（女性生殖器障害）について12回（90分x4回、3クラス）の講義を行い、同校学生の看護教育に携わった。

※ 以上の項目は最低網羅してください。